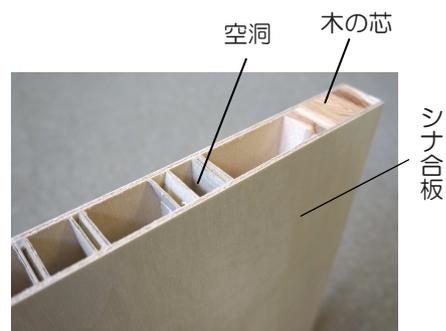


フラッシュ戸と無垢建具の違い

建具は常に関閉したり開けたりするので動きが悪くなると使う方は不満を感じます。同時に質感も大切な要素で軽いフラッシュ戸と重量感のある無垢建具には大きな違いがあります。

■合板フラッシュドア 建具屋がつくる

木の芯材で外周を組み、真ん中には強度を出すための芯を入れて両面から「ラワン合板」や「シナ合板や突板合板」を接着してつくる。小口は5ミリ程度の木材で縁貼りした構造で表面をたたくと、“ポコポコ”と軽い音がします。安価なので使うことも多いが少し経つと劣化がはじまり、耐久年数は約20～25年。



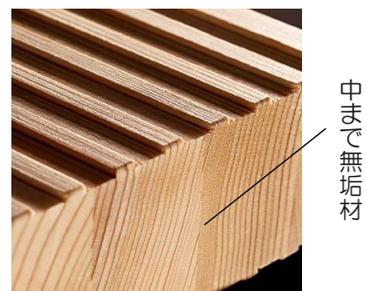
■シート貼りフラッシュドア 新建材メーカーがつくる

建具屋と同様に木で芯組みをして、両面から木目印刷シート貼合板を接着し、小口には0.5ミリの塩ビシートを貼った構造。表面に貼ってあるシート（多くはオレフィンシート）や小口のシートは擦れると剥げてくる。表面をたたくと中が空洞なので軽い“ポコポコ”という音が響く。安価であるが耐久年数は20年～25年とみられる。



■無垢材建具 イマガワがつくる

化学物質を含まない健康素材である木材のみで建具をつくり、木目の揺らぎ感や手触りや香りは心地よさを醸し出す。中まで本物の木材なので、表面をたたいた時に“ゴンゴン”と重量感のある音がし、年が経つにしたがって美しく成熟していきます。硬いものが当たってへこんでも水分を含ませると大部分が元に戻り、ひどい傷も鉋で削るときれいになります。百年以上の耐久性があります。



【経年変化の違い】

「木目印刷シートや突板合板を使ったフラッシュ戸」と「本物素材を使った無垢建具」が時間とともに質感が大きく違ってくことを知ってほしい。写真はどちらも高級住宅で予算がないからという理由で本物素材を使っていないとは思えない。

1) 合板フラッシュドア

昭和42年に建てられた住まいに使われている合板貼りフラッシュ戸。50年間に表面が劣化しみすぼらしくなっている。著名な建築家の設計による東京の住宅。



2) 無垢建具

大正8年に自然素材で建てられた静岡県の別荘。のちに旅館として開業。約100年という時間とともに質感が高まり円熟味が増している。

